

形周溝墓が当地域でも築造され、下稗田遺跡・竹並遺跡・北垣遺跡などで調査されている。

## 二 集落と墓地

弥生時代は、当地域においても集団や集落間の社会的関係が急速に変化していった時代であり、それに伴つて集落が営まれる地理的環境や、集落を構成する各施設の状況もしだいに変化していった。

### 集落の立地環境

弥生時代前期の集落のうち、前葉・中葉の集落は京都平野に入り込んでいた内湾の沿岸部に沿つて営まれるものが多い。これは初期の水稻耕作を行う場合、生産地である水田が、形成されつつあつた沖積地の湿润な低湿地に設定されたためと考えられる。辻垣遺跡では前葉の集落が祓川下流の後背湿地に立地するが、水害に対する防御施設として環濠をめぐらしている。中葉の葛川遺跡も、同じ内湾の北西部に位置し、低丘陵の先端部に貯藏穴群を取り囲む環濠をめぐらしている。また、長井遺跡や石並遺跡の場合、この内湾と外海の周防灘とを分ける海岸砂丘上に立地し、水田を開発する適地が少ないことから、この遺跡を残した人々は水稻耕作以外の狩獵・漁労などに従事していたことも想像される。前期後葉になると海岸から一～三キロメートル入つた平野の奥でも集落が営まれるようになる。しかも、急激にその数が増加するとともに、下稗田遺跡のような大規模な拠点集落が形成されるようになる。この時期には早くも、犀川町タカデ遺跡のように河川の中流域でも小規模な集落が営まれるが、技術的にまだ耕作地として開発しにくい土地であることから、水稻耕作に伴うものか疑問が残る。

集落の増加傾向は中期前葉まで続き、新たな水田開発を目指して、拠点集落から分かれた分村が各地に営まれる。分村型の集落は豊津町金築遺跡、築城町広末・安永遺跡、大平村土佐井ミソンデ遺跡のように、比較的短期間で姿を消すものが多く、中葉まで続いた集落も後葉には途絶えてしまう。下稗田遺跡が示すとおり、京築地域の弥生時代を通じて集落が最も減少するのが中期後葉である。この時期は住居跡の形態や集落の構成の面からも過渡的な時期となっており、築城町安武・深田遺跡や新吉富村尻高畑田遺跡などで、住居跡が調査されている。前期後葉から中期中葉にかけての集落の立地は、一部沖積平野内の微高地に位置するものがあるが、多くは水田に近接する縁辺部の標高三〇～四〇メートル前後の低丘陵上に営まれる。

後期になると、苅田町谷遺跡や苅田町木ノ坪遺跡・築城町十反遺跡のように、平野の奥の舌状台地や沖積地などの標高一〇～二〇メートル前後の低地に、新しい集落が営まれるようになる。一方では下稗田遺跡・竹並遺跡のように、前期から中期にかけて使用していた丘陵上に再び集落を営む場合もある。この時期は一般的に集落の規模が大きくなる。また、大平村穴ヶ葉山遺跡の墓地に副葬された豊富な鉄製品が物語るように、石斧や石庖丁などの主要な石製の道具が、鉄製品に交替する時期でもある。その結果として、中期の段階にはできなかつた土地を新たに水田として開発することが可能になつていつたと想像される。そのことを裏付けるのが、前者にみられるような低地に出現した大規模集落ではないかと考えられる。

### 前期の集落

弥生時代の集落は、井戸や柵列・物見櫓などの施設を設ける場合もあるが、一般的には住居と倉庫が基本となる。当地域の前期における集落の典型は、下稗田遺跡の中葉の時期にみることができる（第47図）。I 地点の丘陵は幅三〇～五〇メートルで、長さは一〇〇メートル以上続いているが、下稗田

I期（中葉のやや新しい段階）には七軒の住居跡が二〇メートル以上の間隔を置いて点在している。そして、それぞれの住居の周辺には一〇基前後の貯蔵穴（第48図参照）が発見されている。つまり、一軒の住居と一〇基前後の貯蔵穴が集落を構成する基本の単位となっていることが分かる。ただし、貯蔵穴は断面形が袋状をなす深い竪穴であるため、住居に比べるとはるかに崩壊しやすいものであった。このため、一軒の住居が一時期に所有していた貯蔵穴は二～五基前後ではないかと想像される。

住居の構造は、基本的に床面の平面形が円形をなす竪穴住居で、中央部に炉を持ち、周りの壁面下に溝をめぐらすものもある。規模はやや小型のものが多く、四～六トルーメートル程度である。貯蔵穴は地表面の入り口部分に比べ壁面の下位や床面のほうが広くなる、いわゆる袋状の断面形をなす。床面の形態は平面形が円形を基本とし、大きさは直径



◎は住居跡 ●は貯蔵穴 一・一は住居跡と貯蔵穴の単位グループ

第47図 下稗田遺跡I地点I期の遺構分布図（縮尺1/2000）

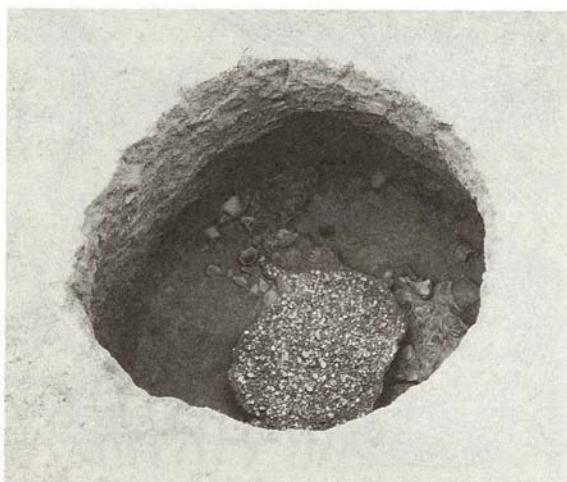
一・九メートル以下の小型か中型が多い。

### 中期の集落

中期前葉から中葉にかけての集落でも、前期にみられた円形堅穴住居跡と袋状

堅穴の貯蔵穴という構成は引き継がれている。ただし、住居の規模は、広末・安永遺跡1号住居跡や下稗田遺跡B地区29号住居跡・竹並遺跡AW地区2号住居跡のように、前期後葉以後直径八・一〇メートル程度の大型のものがみられるようになる。また、中葉になると平面形が橢円形の堅穴住居が現れる。下稗田C地区7号住居跡は長径七・五メートル、短径四・二メートルの住居跡で、床面中央部に炉を持つ。柱穴は壁面下に一・一・五メートルの間隔で設置される特殊な配置を示す(第49図)。ま

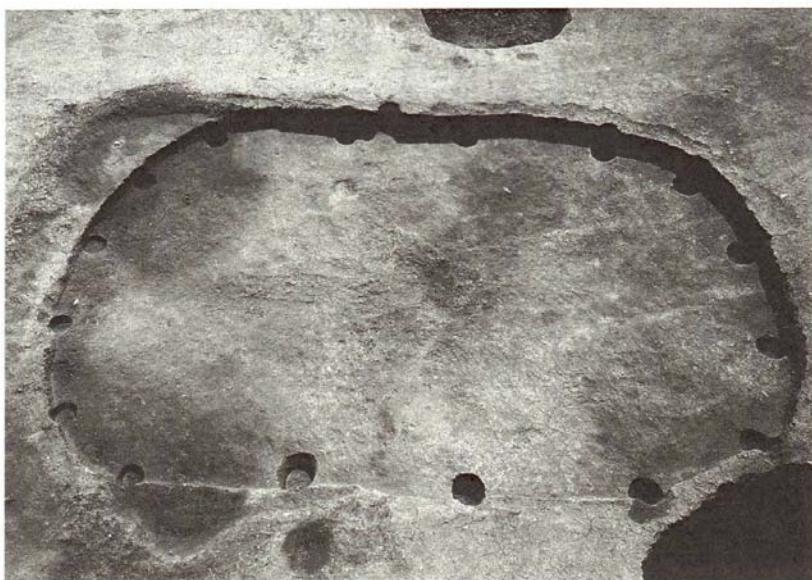
た、中期になると掘立柱の建物が造られるようになる。新吉富村牛頭天王公園遺跡では、二基の貯蔵穴とともに五棟の掘立柱建物跡が確認されており、そのうち1号掘立柱建物跡は長さ約八・五メートル、幅約四・六メートルを計る大型の建物である。ただし、同時に倉庫である貯蔵穴が発見されていることから、この建物は高床倉庫というよりも、なんらかの住居ではないかと考えられる。貯蔵穴は、前期には平面形が円形であるが、中期になると方形のものが現れる。特に、行橋市・京都郡南部から豊前市・築上郡にかけて長方形の平面形の



第48図 下稗田遺跡 A 地区69号貯蔵穴  
(行橋市教育委員会提供)

ものが多くなる。豊津町カワラケ田遺跡、広末・安永遺跡、新吉富村中桑野遺跡などで円形・方形のものが同時に検出されている。規模は前期後葉から大型化する傾向にあり、床面の直径が二・五メートルを超えるものが増加する。下稗田遺跡では二・五メートルを超えるものはすべて前期後葉以後のものである。なお、倉庫としての貯蔵穴は当地域を通じて中期中葉まで続く。

後葉になると集落を構成する住居と倉庫の構造が変化してくる。住居は床面が円形のものに加えて、隅丸方形ないし方形の平面形のものが出現する。築城町安武・深田遺跡61号竪穴住居跡は中期末に属し、南北長六・九メートル、東西幅六・三メートルの平面隅丸方形をなす。周壁下には幅一・五メセンチ前後の溝をめぐらし、中央部には楕円形の炉が作られている。安武・深田遺跡の弥生時代の集落は中期後半から後期初頭にかけてのものであるが、平面形



第49図 下稗田遺跡C地区7号住居跡（行橋市教育委員会提供）

が判明しているものでは円形のものが四軒、方形のものが五軒となつており、相対的に円形から隅丸方形・方形への変化がうかがえる。倉庫については、この遺跡では貯蔵穴が二基しか確認されておらず、一方では住居跡の周囲に多数の柱穴群が検出されている。また、新吉富村尻高畠田遺跡でもこの時期の住居跡が一〇軒見つかっているが、貯蔵穴はまつたくなく、同様に多数の柱穴が検出されている。このように、後葉を前後する時期に、倉庫が貯蔵穴から掘立柱の高床倉庫に移行するものと考えられる。

なお、西日本では中期を中心に、外敵から集落を守るために周囲に大きな溝をめぐらす環濠集落が形成される。しかし、当地域では、前期中葉の葛川遺跡で貯蔵穴からなる倉庫群を取り囲むような環濠が発見されているが、その後集落全体を区画するような大規模な環濠は未発達である。下稗田遺跡のような拠点集落が中期中葉で途絶えるのも、環濠という防御施設に対する意識の希薄さに起因したのかもしれない。

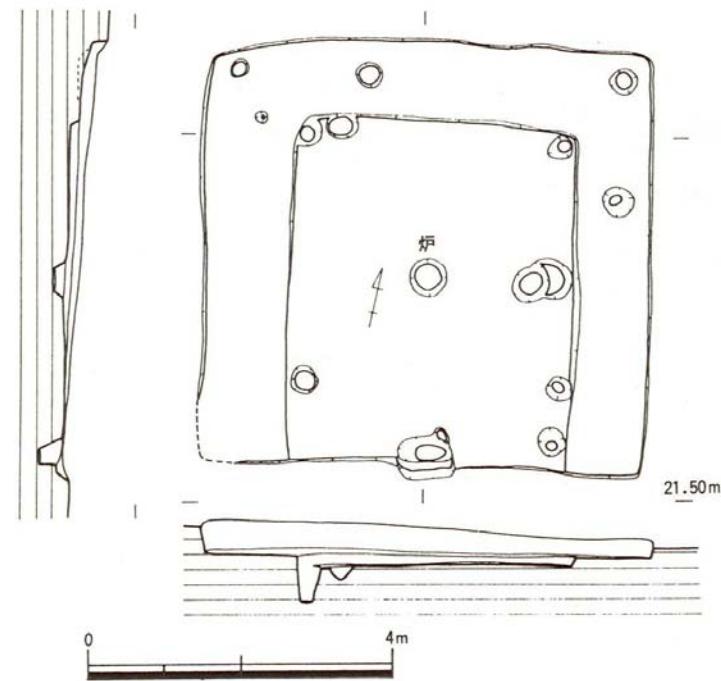
### 後期の集落

後期には沖積平野の奥や洪積台地など現在水田となつてているような低地に、突如として大規模集落が営まれるようになる。苅田町木ノ坪遺跡では、後期から古墳時代初頭にかけての方形堅穴住居跡約八〇軒からなる集落が調査されている。築城町十双遺跡でも、後期後葉から末に最盛期を迎える集落の一部が調査され、三二軒の住居跡が確認されている。集落全体としては、一時期に三〇軒以上存在したことなどが推定されている。一方、低丘陵上に所在する前期から中期にかけての拠点集落であつた下稗田遺跡でも、中期後葉に一時集落が途絶えたのち後期になると再び大規模集落が形成され、七七軒の住居跡が調査されている。これらの集落を構成する住居の一般的形態は、床面がほぼ方形の堅穴住居に統一されている。床面中央部には炉があり、主柱穴はこの炉を挟んで一本設置するものと方形に四本配置するものが多い。

また、一辺の中央部には○・五・一  
トル程度のピットがあり、この辺の  
両側の辺かまたは残りの三辺には床  
面より一段高いベッド状遺構が作ら  
れている（第50図参照）。この住居の  
構造は次の古墳時代前期まで受け継  
がれていく。後期には貯蔵穴に代わ  
って高床倉庫が建築されるようにな  
る。豊前市小石原泉遺跡では後期終  
末の集落が調査されているが、三軒  
の方形竪穴住居跡とともに方一間の  
掘立柱建物跡が二棟発見されている。

## 墓地の変遷

弥生時代の墓地は、  
墓地の変遷  
集落に隣接した場所



第50図 下稗田遺跡後・I・27号住居跡

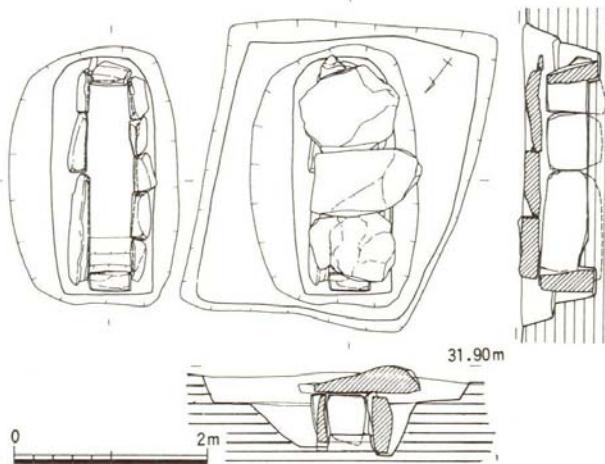
て設定され、前期から中期では共同の集団墓地を形成している。ただし、乳幼児は下稗田遺跡・豊津町金築  
遺跡などにみられるように集落の内部に甕棺に入れて埋葬する例がしばしばみられる。埋葬施設の種類では、

石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓・木棺墓・木蓋土壙墓・甕棺墓などがある。このうち、木棺墓・木蓋土壙墓などに使用される木材は腐食してしまい、発掘調査によつても十分検出されない場合もある。また、大型甕棺墓は北部九州で広くみられる墓制である。京築地域では小児用には使用されているが、成人用の大型甕棺墓は使用されていない。

下稗田遺跡I地区は前期後葉から中期中葉まで継続して営まれた一連の集団墓地である。墓地を構成する遺構は、石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓・甕棺墓など二一五基と祭祀遺構二〇基である。これらの遺構のうち埋葬施設は丘陵頂上部の平坦面に、尾根線に並行するように列をなして築造され、祭祀遺構は埋葬施設の周辺部の斜面側に、点在する（第51図参照）。石蓋土壙墓・土壙墓は、棺の周りに一段掘り下げた墓壙を持つものが六割程度ある。また、副葬品を持つ埋葬施設は一基しかないことには、まだこの時期には集団内部にお



第51図 下稗田遺跡I(1)地区全景  
(行橋市教育委員会提供)



第52図 下稗田遺跡H地区 1. 1号石棺墓

いて個人間の力関係に大きな差異がないことを示している。

中期後葉になると下稗田遺跡の中心集落の北方の丘陵に新たな墓地が作られる。この墓地は部分的に調査され、土壙墓二八基・甕棺墓二三基・祭祀遺構六基などが確認されている。この墓地の土壙墓は、全体的に大型で深い墓壙を持ち、玉類を副葬するものが五基存在する。これは集団内の個人や家族の間にしだいに格差が生じてきたことを示しており、これらの人々を手厚く葬る傾向が現れてきたものである。

後期になると、特定集団のための墓地が作られるようになる。下稗田遺跡ではH地区方形周溝墓の内側から石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓などが一〇基検出されているが、これらのうち四基には素環頭刀・斧・鉈・刀子などの鉄製品が副葬されていた（第52図参照）。竹並遺跡10号墳は七基の埋葬施設を持つ方形周溝墓であるが、このうち二基の主体部から鉄剣・鹿角製刀装具・鉄鎌などが出土している。このような特定集団墓の頂点に立つものが、徳永川ノ上遺跡の墳丘墓群である。四号墳丘墓には七基の棺がおさめられており、そのうち4号棺は、墳丘墓のほぼ中心に位置する棺であるが、銅鏡・鉄刀・玉類などを副葬していた。当遺跡では

これ以外にも同様の遺物を副葬する埋葬施設が多数あり、これらが墳丘墓という集団墓を構成している。そしてこの集団墓が全体として一〇基を超える群を形成している。のことから、当遺跡は京都平野南部に中心勢力を有する有力な集落または一族の墓地と想像される。副葬品にみられるこのような状況は、築上郡南部においても穴ヶ葉山遺跡で確認されている。穴ヶ葉山遺跡は終末期の集団墓地であるが、石蓋土壙墓を主体とした八三基の埋葬施設のうち、約四六セントにのぼる三八基からなんらかの副葬品が出土している。これは、この集団墓地を営んだ集落自体が、ほかの集落に比べ優越していたことを示すものであろう。以上のように、京築地域では後期になると特定集団墓が各地に営まれるようになるが、特定個人墓についてはまだ明らかになつてない。

### 三 道具の変化

#### 土器の地域性

日常生活に使用された最も身近な道具である土器は、その時々の地域文化とその周辺地域との交流について、ありのままの姿を私たちにみせてくれる。

前期前葉では、北部九州で、広く板付I式土器が出土している。中葉から後葉になると、京築地域ではしだいに地域性が顯著になってくる。壺の文様に、それまでの羽状文に加えて綾杉文や円弧文・木葉文が施されるようになる（第53図参照）。また、施文工具として、ヘラ状工具以外にもアカガイなどの鋸歯状の縁辺部を持つ二枚貝が盛んに使用されるようになる。この二枚貝による施文は、山口県西部の響灘から北東九州の